基調報告

我々の憲則を乗り越えて、靖国神社法案が自民党議員立法として提議されている事を為わなければならない。信教自由論、軍国主ギ復活等の問題として、集約される諸問題は、そこに、切り離すことの出来ない天皇及び天皇制を孕むことによって、日本民族の根底に対する解答を示しているのである。それは我々に戦前を想起させるだけでは解決できない問題が有るといわれなければならない。単なるファシズムの道だけではなく、日本民族の民族感情―伝統美に根ざし、戦後民主主ギがついに解決出来なかったナショナリズム観念にひとつの表現を与えようとしているのである。

1. 「英霊」思想の本質

「英霊」という、明治以来の軍国イデオロギーを象徴した表現を前面に押し出す事によって、日本民族意識に触発を与え、日本人民総体（生活思想）を国家的意志に統一しようとする。ここでの英霊思想とは、天皇制支配下での戦争を美化し「聖戦」化するものである。条文に於ける戦死者の行為を「偉業」として「永遠に伝える」という表現がその意図を顕示している。近代日本の百年の歴史は、朝鮮半島と中国大陸を主要目標とするアジア地域への武力侵略の時代であった。「富国強兵」「殖産振興」の二大スローガンを背景とする日本帝国主ギが"永遠に伝えられる偉業"の事実は、朝鮮半島に於ては、江華島事件、甲申事変、閔妃事件、日清日露戦争を経て日韓併合へと続く一連の侵略作戦、更に3・1（万セ）独立運動に対する大弾圧と朝鮮人強制連行の事実、一方大陸に於いては、40万人と推定される南京大虐殺をはじめ、"三光作戦"を貫徹し尽した、多大なる殺りくと収奪を行ったのである。そのアジア人民に対する戦争責任の償いの思想を完全に欠落させ、侵略戦争を「聖戦」として人民に印象付けようとするのが、靖国法案に顕われる「英霊」思想の本質であると断定するのである。

2. 靖国体制を支える基盤 ―日本民族に於ける宗教意識の問題

呪術崇拝・権威主義的な"無信仰"とも云うべき日本民族の意識構造――「天皇及び天皇制」が本来世襲して来たものは、特殊な宗教的祭儀だけである。①農耕民の支配者、②宗教的な祖霊との性的儀式の2点であるが、そこに神の発生と人間の出生との神統的連続性においてとられる宗教意識の醸成と操作がほどこされることによって〈祭り〉と政治を一体化する〈祭政一致〉の民族宗教（天皇制）一の特質が基礎付けられたのである。それは公・私における縦・横の〈連続性〉と〈帰一性〉を基軸とした交錯地点に立脚した〈現人神〉信仰の成立である。――が、近代日本に於て資本主義の発展に即して、その民族性を残したまま変幻自在な展開をなして対応し、それは、民衆の存在基盤・行動原理ばかりでなく、自然感情をも超越者〈天皇〉を媒介することによって、即ち、民衆の擬似"自発性"を巧妙に調達することによって、国家的統一の下に置くことに成功した。（天皇制ナショナリズムの確立）

今、また「靖国法案」は日本民族の意識構造の中で「天皇及び天皇制ナショナリズム」と結びつくことによって「英霊」思想の本質を欠落させ、戦死者を神格化

し、侵略戦争を「聖戦」と美化し、正当化させ国家の大々的「靖国」キャンペーンの中で確立されんとしている。

この民族宗教を無批判的に受け入れる日本民族の宗教意識構造と土壌に対して、我々は、ここから根源的な問いを発していかなければならない。しかし我々にとってこの前提はあまりにも重くのしかかってくる。その情況は権力者の圧倒的攻勢に対して、終始一貫して守勢にまわらなければならないだけでなく、日本歴史の中において今だかつて徹底的な宗教批判、民族宗教否定が一度も成されなかったことも起因するかも知れないが、本質的には、このナショナリズム観念（日本神学）に対して十分対応でき得る思想が日本の歴史の中に創出されなかったことが、最大の暇疵である。我々は、ここに我々の立脚点を置くのである。

権力者の側から見れば、この宗教性に基づく民族主義を利用して全ての階級性を穏やかにし、倒錯的排外主義に転化し、そのエネルギーを侵略のエネルギーへと燃焼させたのである。この事は、戦死者の悲しみ、うらみを巧みに幻想の中に吸収して国家意識の統一のため利用したとも云える。

3、70年代状況と靖国神社法案の持つ意味

日帝支配階級が意図する70年代侵略体制に向けての全軍事力の増強と国内の帝国主義的秩序再編成の課題である。その中で「靖国」法案が担なう役割は、単なる（直接的な）軍国主義復活（ファシズム）だけではなく、日本人全体を含む、新たな民族主義意識の醸成にある。即ち国家的には、高度成長政策、企業の合理化に伴う、根源的ひずみから発する告発、怨嗟に対して、東南アジア再侵略をねらう日帝は、国家の方向に、人民の支持をとりつけアジア経済侵略体制を正当化し、積極的に協力せしめるための国家意識の高揚と統一にある。即ち65年（日韓条約）を契機とした国益論に呼応する天皇制イデオロギーの思想攻勢（道徳教育、神話教育、期待される人間像論、紀元節復活、天皇行幸及び海外巡遊）の中で最終的な帝国主義的秩序の確立を決定せんとのである。換言するなら国家・社会に対する批判の眼をもたないまゝ、盲目的に体制に服従する人間、更に国家の為に死ぬ事が最高の美徳とする人間を、全人民の日常的レベルにまで深化させる事を目的とするものである

4靖国斗争とはいかなる斗いか

帝国主義的秩序再編の動きの中で、靖国法案の持つ意味はイデオロギー操作による国家意志の統一であり、それと日本民族の心の底深く喰い入っている民族共同体意識を否定する地点から出発しなければならない。即ち靖国斗争は宗教的観念性によって現実を捨象する民衆の深部に入り、その宗教性に根ざす、民族主義をどう把え変革するかという斗いである。

前近代の民衆思想と天皇

〈現代の天皇観〉……松浦玲氏

・天皇が最上位にあるという文化の型は、日常生活の中でいろんなものを媒介にたたきこまれる。

・明治の帝国憲法体制や太平洋戦争期の後遺性だけでなたづけられない。

・とりわけ天皇の権威は、硬軟さまざまに使い分けることが可能な価値として現存している。
そして、それを維持しているのがいまの国家であるが、それを創ったのは必らずしも、いまの国家ではない。いまの国家とは別の根拠をもつ存在として歴史の中から長い糸をひいてきている。

〈左翼における天皇観の系譜〉

・講座派を中心とする一派
国民を太平洋戦争に導いた天皇制が明治以後の産物であることを強張した。

論証
- 国民の間では忘れられていた天皇をいかに強引に復古させ、定着させたか。
- 国民がいかに天皇になじまなかったか。
- 天皇制による民衆把握がいかに難行したか。

それがどうして明治も末期になってようやく成功していたのか。

〈問題点〉なぜ明治維新に際してほかならぬ天皇制がもち出されたかの解答は保留している。

・藤田省三「維新の精神」
幕藩体制と朝廷との関係は、「浪人」の心理的欲求がレディメイドのシンボルとしての「天皇」に手取り早く収斂するのにちょうど都合よく出来ていたのである。「天皇」シンボルは「幕藩」と共倒れとなるには、あまりに「幕藩」から離れていたが、同時に当時の「浪人」の個人にとっても「幕藩」よりヨリ高く大きい忠誠対象として深く思いはくぼどに流通し、浸透していたのである。

↓

〈理由〉・「公家」世界と「武家」世界との峻厳な隔離、
・武家の伝統的な名目上の「尊皇」という両契機の結合は、解体期において「浪人」の尊皇熱が高昇する前提条件となったのである。

〈問題点〉藤田省三は、はじめから「浪人」と「天皇」の関係しか提起していない。

・色川大吉「明治の文化」
—精神構造としての天皇制—
天皇制が一定の幻想を通していかに民衆の心に接近するか、そのプロセスと方法を問題にする。天皇制は単に否定的にとらえられるものではなく、それはナショナリズムの源泉でもあり、資本主義の法則は日本においては天皇制と結びつくことにおいて、はじめて仮借なく日本社会を貫徹してきたと規定し、天皇制の精神構造を対象化し明確化しようとする。

⇓

・精神構造としての天皇制は〈不可視の巨大な暗箱〉である。そして天皇制において、幻想の状況しかも全情況の対象化を許さない（内縛の論理）が大衆の側にあることのほうが恐怖なのである。

・伝統意識としての「国体」観念は日本史上一千余年にわたって脈々と続いてきた重みがある。

〈天皇のイメージ〉
民衆——「狂言でみる公卿さん」（天草漁民）
自由民権派豪農のイメージ—— あえて批判しない。
・私擬憲法草案の第一条に皇室が帝位をつぐべきだと明記したものが多い。
・民権派は「日本」の内側から政府と皇室の間にクサビをうちこもうとする。

〈松浦玲の危惧〉
色川は一千年にわたる国体観念の"脈々たる伝統"と"大衆の生活思想"とを結びつけている。ここで問題なのは、天皇制をその内側からのり越えるためにその形成期や変革期にさかのぼって、内在論理を再検討し変革の契機をつかみ出そうという努力がはじめられている。これを支持することの不可避的な危険性がある。

・吉本隆明
〈国家の定義〉
家族または家族の集団の共同性の次元をある共同性がいささかでも離脱した時、生ずるものが国家である。

※ 天皇制を無化する契機を、天皇(制)の千数百年の歴史をそれ以前の日本を掘りおこして対置することにより一挙に相対化することに求める。

なぜなら、本居宣長以後（三島由紀夫、川端康成）の方法にあざむかれている。

※吉本は、なぜ天皇制を否定するために長い時間軸の大舞台を設定したのか、
戦地におもむいた心境
「お国のため」ではなく「天皇のため」
↳「絶対感情」の対象、
⇓
大多数の感情、

太平洋戦争の敗戦から現在までの共同経験を「総合」して、わが国の大多数は、特異な〈約変〉の型をもっている。

〈約変〉の型——必要以上の部分を〈国家〉に預金している感性である。
↓

千数百年前に天皇(制)という出自不明の異族の支配がはじまってから土着種族たる日本人の感情は千数百年後のマッカッサーによる占領に際してまさにその本質を露呈した。

天皇制は、土俗的な農耕、祭儀を自分たちの世襲祭儀の中枢にとり入れた。
〈可能であった理由〉
・共同体の宗教的な観念の総和をわがものとして保ち続けた。
・政治的な支配からつねに一定の遠近法をたもって存在した。

(松浦氏)
土着種族である日本人は、天皇が出自不明の異族であることをいつ忘れたのであろうか、

※ 日本人の感性は、天皇(制)こそが日本だと感じる感性にまるごとすっぽりとつつまれてしまってどうにも動きがとれない。

松浦玲の批判
明治以前の天皇制を長い軸で一本で捉えすぎている。
民衆の内部における天皇思想は「一千余年」のもの、あるいは「千数百」もの長い歴史を持ってはいない。もっと短かく、もっと段階的にずれながら重層している。

民衆の捉え方
民衆が権力体制下にあってみじめな思想状況を示すことを、ただちにすべて天皇(制)思想だとすることはよくない。

日本あるいは、日本人の捉え方
・吉本のたてた命題がすべての平均的日本人にあてはまるのか
⇓
・相対化に成功して、天皇(制)勢力がまったくの異族であったとしても、やはり、日本人の歴史として発展してきたのではないか。

〈結論〉天皇制を否定し、「無化」する契機を天皇制の千数百年の歴史の内側でみつけなければならないのではないか、

-MEMO-

〈□のためについて〉

この前の戦争について善かったとあからさまに言う人はいない。その戦争の基礎にあった「八紘一宇」だとか「大東亜共栄圏」だとか、天照大神の子孫で現人神の天皇を戴く日本人の使命だとか、そんなイデオロギーをいまも信じている人はほとんどない。しかし、それらの諸々が、その時の□の方針としてやられたのであるからには、それに忠実に従ったものは、いまもなお評価されるべきだと、日本人の大多数は思っているのである。そのことはいまの□家によって公式に表明され、また具体的な行政措置となって実施されており、□民はそれを支持しかつ受け入れている。

〝□のためについて〟
〈日本人(の大多数)は□というものを是非善悪とは関係ないものあるいはそれ自身としては悪を含んでいないもの、つまり絶対善だと頭から決めこんでいる〉と仮定してみる。そうすればそれに従って〝□のため〟も絶対善となる。その「□」が土地とそこに住む人間の総体であるか、それとも時の権力であるかというような区別は、あまりやかましく云わない方がよい。両方含めて「□」なのである。

〝対中□□家観と日本人の□家観・「□」意識〟

(宣長)殷周革命以後の天命思想を基礎とした儒教的□家観を□を取ったとかこぼしたとかいう見地を言いたてあくまでも拒否し、それに代るものとして、むしろ殷周革命以前の殷王朝的な原理をもちだしている。神である天皇の祖先から、やはり神である当代の天皇へ皇統が伝えられていることをあくまで重視した。

・勝部真長
日本人は「個別主義」という体質を持っており、普遍主義(儒教・キリスト教・仏教・マルクス・レーニン主義)が、一定限度以上に強くなると「心の安らぎ」がえられなくなって、個別主義に回帰する。

個別主義＝「古式の個人と社会との融合の共同体(天皇制□家)への憧憬」
(危険なものに思える)

個別主義を日本人に本質的なものと考えあらゆる歴史現象をそれによって説明し、さらに将来にむかって擁護しようとしている。

「天皇制君主□」
〈批判〉
個別主義とは普遍主義のもつ価値体系を拒否し、ある価値体系の適応を拒否、独自の価値体系を主張する。

宣長―天命の思想を拒否、万世一系の天皇―
相手が絶対持たず、したがって本来比較しようがない問題を持ちだすことによって、相手に対抗するのみならず一気に相手を見下そうとする。

―時期―
徳川体制の無意味さが露呈され、しかも、それを倒すことはまだ現実性をもった幻想として出てきにくい。

記紀神話が積極的な独自の意味を持つ様になる。

(儒教)
・幕府・藩体制
(支配者、非支配者の明確な区別・世襲。
支配の必要性の説明はない。

〈武士にとって〉是非善悪を越えた存在。
(ex) 植民者―植民地。

―儒教―
植民者のキリスト教とよく似た性格。
儒教自体が無力化されてしまう。

[初期]―闇斎学、水戸学、山鹿素行
武士が不当かつ無意味に支配していることについて儒教的原理では合理化しきれないところを、天皇や神道を持ち出して補強した。

天命を受けて天皇が幕府に委任し、それを認証した。

[近世中期]―仁斎・徂徠・宣長
〈宣長〉は儒教の「革命」思想を捨てそれに代えるに是非善悪を超えた天皇の価値を持ちだし、それによって儒教の価値体系に対して開きなおる。幕府と藩の是非善悪を問わず、それを問おうとする儒学を、日本には適用できないよそものの思想だと決めつけるのである。

（最後に）
世界思想としての日本思想（宣長→現在）

儒教そのものが□そのものの是非善悪を問うのに対し、日本思想は□そのものの是非善悪を問わない。

いまの日本人は明治から敗戦を経て現在に至る日本の近代□家について、これと同じ発想をしているのではないか。

"□のため"の是非善悪を問わないのは、かつて支配された人民そのものである。

「イエスとイエス以前」　笠原芳光氏

a.宗教の歴史
- 繁栄――布教の拡大・信者の増加・伽藍の壮麗・教義の精密
- 滅亡――宗教の変革・開祖への遡源・形態の簡素化・真理の生命化・宗教の止揚・宗教ならざるものへの再生

b.向臥性としてのイエス
- キリスト教→キリスト→イエス
  - キリスト教――強固な組織（教団）に対する批判。
  - キリスト――キルケゴールのキリスト理解にたいする批判。
- イエス以前→イエス
  - 人間は人間であるのではなく、人間になるのだ（榊主文）
  - イエスがイエスになっていったように、人間が人間になり、自己が自己になる途を歩む。

※ 現代における人間の向臥には、かつて神の向臥・救済や信仰の向臥と云われたものが含まれており、そのような意味での"人間"のリアリティ"人間"における実存的関係をイエスに見出すということである。
※ ふつうの人間のなかに、ただひとりの人間、歴史上の一人物のなかにかけがえのない自己自身を見るという逆説のみがイエスを向臥とするゆえんである。

〈共同体は必要か〉

a. 共同体――教会・□隊（バルト・ベケーニン）
共同性――人間社会
（関係性）

b. 宗教――制度的なものであり、イデオロギー的なものである。
宗教性――一種の根源的な関係性。

〈向臥性としての神〉

a. 対象化される客体でもなく、対象化する主体でもない神はひとつの向臥性。

b. 天皇制にたいするアプローチの端初。

- ユダヤの土着性・ナショナリズム、あるいは時代性を越えた存在として、ユダヤ人であることを自己否定する存在であった。その意味でひとつの普遍性というものをもっているのではないか。（非ユダヤ的ユダヤ人）

- 日本の神道などにおける神は人間の外にある神ではなく、人間や自然と連続し、一体化した神である。しかし、それは"かみ"（上）であることにおいて、一つの権威・権力ではないか。権力は向臥は自己の向臥であるという意味において日本の神は向臥性としてあらわれる。

我々の視点……天皇制の超克及び靖□斗争に関わるとき、何故我々は徹底した宗教批判をせざるを得ないのか。それは普遍化された共同の幻想性に自己＝主体をあずけることなく、クサビを打つべく批判的主体をいかに獲得しうるのか、という向臥でもあると考える。

以上で笠原芳光氏の宗教・キリスト教・キリスト・イエスに関しての人間性（観）及び向臥意識の所在をまとめてきたが、さらに他のキリスト者等のそれらに関する向臥意識との対峙を通して、笠原氏の、そして我々の打つべき思想（＝現実）の課題を明らかにしていきたい。

○ 三島康男

キリスト教の幻想的観性に歯止めを〈超越思考〉ではなく、

〈科学性〉に基づいて世俗化へ貫徹し、そのときただの人となる具体的方途を日常性の中で追求する前進がはじまる。そして本質を適確にみきわめて"この道しかないぞ"という、まさにその道がただの人への道である。
そのように生きることがイエスに生きることであり、
現代の思想との真の結び付きが可能となる⇒キリスト教立場の実現へ

〈超越思考〉及び本源を志向する思考形態、
主張としてはそこからでていく方向を示しながらその本源に到達する具体的理論は少しも明確に提示されていない。
—高尾批判へ—
科学が教条(宗教性)に陥いるのはむしろ原点を押えないからではなく、観念をもつた人間分析の欠陥からくるのである。
—吉本「共同幻想論」の評価—

◦ 高尾利数

"ただの人"イエスの復权——本来まったく無なるものが、つまり主体としてはまったく消滅する一点において、尚しくも一個の主体として立てられ、他者および自然と豊かな相互連帯、依存の関係のなかにおかれ、喜び、いつくしみ、健やかさ、美しさを感じるように置かれていること(これが「神の国」の内実)　この単純にして、文字どおり「有難い」事実を心ひくく感謝しつつ認め受けとめる生きざまをこそ、イエスは〈信仰〉(=事実を事実として、偏見なく願望なく受容し、それに主体的に参与しつつ生きる生きざまの総体)と呼んだのである。
……それは失楽園へのノスタルジアでもなく、空想としてのユートピアの願望的先取りでもなく、現在的テロスの実在の証言として、われわれを正しく「ただの人」たらしめ、あらゆる「ただならぬ」状況への希望に満ちた否定的かかわりを促す現実なのである。
たえず現実的、具体的、歴史的現実との責任応答的生きざまのただ中にある神。神は、われわれの存在の無根拠性、廃棄不可能な主体性、そして選び取る自由の責任性の現実に呼応する徴表である。

◦ 佐々木宏己

原点の実在……私たちにとって大切なものは唯一つ、私たち自身の成立の根柢において「信仰」や「宗教」をも含めてあらゆる人のはたらきに先立って永遠に現存する「インマヌエル」—神われらとともに在す—という事実そのもの、すなわち、人の子イエスの一生としてまざまざと眼前に触れることができるように示されたかの一点、絶対に弁証法的(不可分、不可同、不可逆的)な神人の活ける関係にほかならぬ、インマヌエルなる神、この原関係の直接の支配のもとに在ることの一点では「キリスト者も反キリスト者」も「神学も哲学」もない。

※ 次に、現代における神学的状況を、滝沢氏の分析において整理する。

◦ 自由主義神学——近代(科学、ヒューマニズム)支配——キリスト教の市民权の獲得へ。
「イエス・キリスト」から超越的な要素を一切排除しつつ、近代社会の理想像を描きだすことによってキリスト教の有効性を時代に立証しようという試み。
近代ヒューマニズムの存立の空怪 ⟶ 試みの空しさ。

◦ 弁証法的神学(危機神学)------カール・バルトの出現

バルトの眼 ⟨ インマヌエルの原事実(A)
　　史的イエスの生内容(B)　この両者の区別関係の明確化
⇓
バルト主義者) への堕落の傾向排除
正統 〃)

◦ バルト ⟶ バルト主義者 ——2方への後退
　　自然的神学

バルトがイエスにおいて見るのは、もっぱら永遠に現在的な神人の存在ないしはたらきに限られる。イエスという人間的主体の、それじたい正確さを問われるべき自己決定の内容—つまり史的イエスの言動—の確認と評価は、完全にイエスにかんするかれの関心の外に脱落する。イエス自身の服従といっても、それはいつもただそれだけで神なる永遠の「子」の「父」にたいするそれであって、肉なる人イエスの、父の御意、言ないし義に対する服従ではない。

◦ 史的イエス------イエスはただ、一人の人として、自然に十分に生きた人。

「史的イエス」の位置と役割が正しく取りあげるためには、何よりもまず第一に史的イエスがまさにそこからそこに向かって、その完全な姿、徴しとして現存していた神人の限界点に終始一貫堅くとどまることによって、バルトの神学になお残る旧き思惟を一掃するとき「史的イエス」は始めて私自身のために、その生を、生々とした姿で現わすことでしょう。そのことなしに、バルト神学を超えようとする者は「人間性」「科学性」それほか何ものの名によろうと、かならずバルト以前の巷に顛落するほかはない。

し、侵略戦争を「聖戦」と美化し、正当化させ国家の大々的「靖国」キャンペーンの中で確立されんとしている。

この民族宗教を無批判的に受け入れる日本民族の宗教意識構造と土壌に対して、我々は、ここから根源的な問いを発していかなければならない。しかし我々にとってこの前提はあまりにも重くのしかかってくる。その情況は権力者の圧倒的攻勢に対して、終始一貫して守勢にまわらなければならないだけでなく、日本歴史の中において今だかつて徹底的な宗教批判、民族宗教否定が一度も成されなかったことも起因するかも知れないが、本質的には、このナショナリズム観念（日本神学）に対して十分対応でき得る思想が日本の歴史の中に創出されなかったことが、最大の暇疵である。我々は、ここに我々の立脚点を置くのである。

権力者の側から見れば、この宗教性に基づく民族主義を利用して全ての階級性を穏やかにし、倒錯的排外主義に転化し、そのエネルギーを侵略のエネルギーへと燃焼させたのである。この事は、戦死者の悲しみ、うらみを巧みに幻想の中に吸収して国家意識の統一のため利用したとも云える。

3、70年代状況と靖国神社法案の持つ意味

日帝支配階級が意図する70年代侵略体制に向けての全軍事力の増強と国内の帝国主義的秩序再編成の課題である。その中で「靖国」法案が担なう役割は、単なる（直接的な）軍国主義復活（ファシズム）だけではなく、日本人全体を含む、新たな民族主義意識の醸成にある。即ち国家的には、高度成長政策、企業の合理化に伴う、根源的ひずみから発する告発、怨嗟に対して、東南アジア再侵略をねらう日帝は、国家の方向に、人民の支持をとりつけアジア経済侵略体制を正当化し、積極的に協力せしめるための国家意識の高揚と統一にある。即ち65年（日韓条約）を契機とした国益論に呼応する天皇制イデオロギーの思想攻勢（道徳教育、神話教育、期待される人間像論、紀元節復活、天皇行幸及び海外巡遊）の中で最終的な帝国主義的秩序の確立を決定せんとのである。換言するなら国家・社会に対する批判の眼をもたないまゝ、盲目的に体制に服従する人間、更に国家の為に死ぬ事が最高の美徳とする人間を、全人民の日常的レベルにまで深化させる事を目的とするものである

4靖国斗争とはいかなる斗いか

帝国主義的秩序再編の動きの中で、靖国法案の持つ意味はイデオロギー操作による国家意志の統一であり、それと日本民族の心の底深く喰い入っている民族共同体意識を否定する地点から出発しなければならない。即ち靖国斗争は宗教的観念性によって現実を捨象する民衆の深部に入り、その宗教性に根ざす、民族主義をどう把え変革するかという斗いである。

前近代の民衆思想と天皇

〈現代の天皇観〉……松浦玲氏

・天皇が最上位にあるという文化の型は、日常生活の中でいろんなものを媒介にたたきこまれる。

・明治の帝国憲法体制や太平洋戦争期の後遺性だけでなたづけられない。

・とりわけ天皇の権威は、硬軟さまざまに使い分けることが可能な価値として現存している。
そして、それを維持しているのがいまの国家であるが、それを創ったのは必らずしも、いまの国家ではない。いまの国家とは別の根拠をもつ存在として歴史の中から長い糸をひいてきている。

〈左翼における天皇観の系譜〉

・講座派を中心とする一派
国民を太平洋戦争に導いた天皇制が明治以後の産物であることを強張した。

論証
- 国民の間では忘れられていた天皇をいかに強引に復古させ、定着させたか。
- 国民がいかに天皇になじまなかったか。
- 天皇制による民衆把握がいかに難行したか。

それがどうして明治も末期になってようやく成功していたのか。

〈問題点〉なぜ明治維新に際してほかならぬ天皇制がもち出されたかの解答は保留している。

・藤田省三「維新の精神」
幕藩体制と朝廷との関係は、「浪人」の心理的欲求がレディメイドのシンボルとしての「天皇」に手取り早く収斂するのにちょうど都合よく出来ていたのである。「天皇」シンボルは「幕藩」と共倒れとなるには、あまりに「幕藩」から離れていたが、同時に当時の「浪人」の個人にとっても「幕藩」よりヨリ高く大きい忠誠対象として深く思いはくぼどに流通し、浸透していたのである。

↓

〈理由〉・「公家」世界と「武家」世界との峻厳な隔離、
・武家の伝統的な名目上の「尊皇」という両契機の結合は、解体期において「浪人」の尊皇熱が高昇する前提条件となったのである。

〈問題点〉藤田省三は、はじめから「浪人」と「天皇」の関係しか提起していない。

・色川大吉「明治の文化」
—精神構造としての天皇制—
天皇制が一定の幻想を通していかに民衆の心に接近するか、そのプロセスと方法を問題にする。天皇制は単に否定的にとらえられるものではなく、それはナショナリズムの源泉でもあり、資本主義の法則は日本においては天皇制と結びつくことにおいて、はじめて仮借なく日本社会を貫徹してきたと規定し、天皇制の精神構造を対象化し明確化しようとする。

⇓

・精神構造としての天皇制は〈不可視の巨大な暗箱〉である。そして天皇制において、幻想の状況しかも全情況の対象化を許さない（内縛の論理）が大衆の側にあることのほうが恐怖なのである。

・伝統意識としての「国体」観念は日本史上一千余年にわたって脈々と続いてきた重みがある。

〈天皇のイメージ〉
民衆——「狂言でみる公卿さん」（天草漁民）
自由民権派豪農のイメージ—— あえて批判しない。
・私擬憲法草案の第一条に皇室が帝位をつぐべきだと明記したものが多い。
・民権派は「日本」の内側から政府と皇室の間にクサビをうちこもうとする。

〈松浦玲の危惧〉
色川は一千年にわたる国体観念の"脈々たる伝統"と"大衆の生活思想"とを結びつけている。ここで問題なのは、天皇制をその内側からのり越えるためにその形成期や変革期にさかのぼって、内在論理を再検討し変革の契機をつかみ出そうという努力がはじめられている。これを支持することの不可避的な危険性がある。

・吉本隆明
〈国家の定義〉
家族または家族の集団の共同性の次元をある共同性がいささかでも離脱した時、生ずるものが国家である。

※ 天皇制を無化する契機を、天皇(制)の千数百年の歴史をそれ以前の日本を掘りおこして対置することにより一挙に相対化することに求める。

なぜなら、本居宣長以後（三島由紀夫、川端康成）の方法にあざむかれている。

※吉本は、なぜ天皇制を否定するために長い時間軸の大舞台を設定したのか、
戦地におもむいた心境
「お国のため」ではなく「天皇のため」
↳「絶対感情」の対象、
⇓
大多数の感情、

太平洋戦争の敗戦から現在までの共同経験を「総合」して、わが国の大多数は、特異な〈約変〉の型をもっている。

〈約変〉の型——必要以上の部分を〈国家〉に預金している感性である。
↓

千数百年前に天皇(制)という出自不明の異族の支配がはじまってから土着種族たる日本人の感情は千数百年後のマッカッサーによる占領に際してまさにその本質を露呈した。

天皇制は、土俗的な農耕、祭儀を自分たちの世襲祭儀の中枢にとり入れた。
〈可能であった理由〉
・共同体の宗教的な観念の総和をわがものとして保ち続けた。
・政治的な支配からつねに一定の遠近法をたもって存在した。

(松浦氏)
土着種族である日本人は、天皇が出自不明の異族であることをいつ忘れたのであろうか、

※ 日本人の感性は、天皇(制)こそが日本だと感じる感性にまるごとすっぽりとつつまれてしまってどうにも動きがとれない。

松浦玲の批判
明治以前の天皇制を長い軸で一本で捉えすぎている。
民衆の内部における天皇思想は「一千余年」のもの、あるいは「千数百」もの長い歴史を持ってはいない。もっと短かく、もっと段階的にずれながら重層している。

民衆の捉え方
民衆が権力体制下にあってみじめな思想状況を示すことを、ただちにすべて天皇(制)思想だとすることはよくない。

日本あるいは、日本人の捉え方
・吉本のたてた命題がすべての平均的日本人にあてはまるのか
⇓
・相対化に成功して、天皇(制)勢力がまったくの異族であったとしても、やはり、日本人の歴史として発展してきたのではないか。

〈結論〉天皇制を否定し、「無化」する契機を天皇制の千数百年の歴史の内側でみつけなければならないのではないか、

-MEMO-

〈□のためについて〉

この前の戦争について善かったとあからさまに言う人はいない。その戦争の基礎にあった「八紘一宇」だとか「大東亜共栄圏」だとか、天照大神の子孫で現人神の天皇を戴く日本人の使命だとか、そんなイデオロギーをいまも信じている人はほとんどない。しかし、それらの諸々が、その時の□の方針としてやられたのであるからには、それに忠実に従ったものは、いまもなお評価されるべきだと、日本人の大多数は思っているのである。そのことはいまの□家によって公式に表明され、また具体的な行政措置となって実施されており、□民はそれを支持しかつ受け入れている。

〝□のためについて〟
〈日本人(の大多数)は□というものを是非善悪とは関係ないものあるいはそれ自身としては悪を含んでいないもの、つまり絶対善だと頭から決めこんでいる〉と仮定してみる。そうすればそれに従って〝□のため〟も絶対善となる。その「□」が土地とそこに住む人間の総体であるか、それとも時の権力であるかというような区別は、あまりやかましく云わない方がよい。両方含めて「□」なのである。

〝対中□□家観と日本人の□家観・「□」意識〟

(宣長)殷周革命以後の天命思想を基礎とした儒教的□家観を□を取ったとかこぼしたとかいう見地を言いたてあくまでも拒否し、それに代るものとして、むしろ殷周革命以前の殷王朝的な原理をもちだしている。神である天皇の祖先から、やはり神である当代の天皇へ皇統が伝えられていることをあくまで重視した。

・勝部真長
日本人は「個別主義」という体質を持っており、普遍主義(儒教・キリスト教・仏教・マルクス・レーニン主義)が、一定限度以上に強くなると「心の安らぎ」がえられなくなって、個別主義に回帰する。

個別主義＝「古式の個人と社会との融合の共同体(天皇制□家)への憧憬」
(危険なものに思える)

個別主義を日本人に本質的なものと考えあらゆる歴史現象をそれによって説明し、さらに将来にむかって擁護しようとしている。

「天皇制君主□」
〈批判〉
個別主義とは普遍主義のもつ価値体系を拒否し、ある価値体系の適応を拒否、独自の価値体系を主張する。

宣長―天命の思想を拒否、万世一系の天皇―
相手が絶対持たず、したがって本来比較しようがない問題を持ちだすことによって、相手に対抗するのみならず一気に相手を見下そうとする。

―時期―
徳川体制の無意味さが露呈され、しかも、それを倒すことはまだ現実性をもった幻想として出てきにくい。

記紀神話が積極的な独自の意味を持つ様になる。

(儒教)
・幕府・藩体制
(支配者、非支配者の明確な区別・世襲。
支配の必要性の説明はない。

〈武士にとって〉是非善悪を越えた存在。
(ex) 植民者―植民地。

―儒教―
植民者のキリスト教とよく似た性格。
儒教自体が無力化されてしまう。

[初期]―闇斎学、水戸学、山鹿素行
武士が不当かつ無意味に支配していることについて儒教的原理では合理化しきれないところを、天皇や神道を持ち出して補強した。

天命を受けて天皇が幕府に委任し、それを認証した。

[近世中期]―仁斎・徂徠・宣長
〈宣長〉は儒教の「革命」思想を捨てそれに代えるに是非善悪を超えた天皇の価値を持ちだし、それによって儒教の価値体系に対して開きなおる。幕府と藩の是非善悪を問わず、それを問おうとする儒学を、日本には適用できないよそものの思想だと決めつけるのである。

（最後に）
世界思想としての日本思想（宣長→現在）

儒教そのものが□そのものの是非善悪を問うのに対し、日本思想は□そのものの是非善悪を問わない。

いまの日本人は明治から敗戦を経て現在に至る日本の近代□家について、これと同じ発想をしているのではないか。

"□のため"の是非善悪を問わないのは、かつて支配された人民そのものである。

「イエスとイエス以前」　笠原芳光氏

a.宗教の歴史
- 繁栄――布教の拡大・信者の増加・伽藍の壮麗・教義の精密
- 滅亡――宗教の変革・開祖への遡源・形態の簡素化・真理の生命化・宗教の止揚・宗教ならざるものへの再生

b.向臥性としてのイエス
- キリスト教→キリスト→イエス
  - キリスト教――強固な組織（教団）に対する批判。
  - キリスト――キルケゴールのキリスト理解にたいする批判。
- イエス以前→イエス
  - 人間は人間であるのではなく、人間になるのだ（榊主文）
  - イエスがイエスになっていったように、人間が人間になり、自己が自己になる途を歩む。

※ 現代における人間の向臥には、かつて神の向臥・救済や信仰の向臥と云われたものが含まれており、そのような意味での"人間"のリアリティ"人間"における実存的関係をイエスに見出すということである。
※ ふつうの人間のなかに、ただひとりの人間、歴史上の一人物のなかにかけがえのない自己自身を見るという逆説のみがイエスを向臥とするゆえんである。

〈共同体は必要か〉

a. 共同体――教会・□隊（バルト・ベケーニン）
共同性――人間社会
（関係性）

b. 宗教――制度的なものであり、イデオロギー的なものである。
宗教性――一種の根源的な関係性。

〈向臥性としての神〉

a. 対象化される客体でもなく、対象化する主体でもない神はひとつの向臥性。

b. 天皇制にたいするアプローチの端初。

- ユダヤの土着性・ナショナリズム、あるいは時代性を越えた存在として、ユダヤ人であることを自己否定する存在であった。その意味でひとつの普遍性というものをもっているのではないか。（非ユダヤ的ユダヤ人）

- 日本の神道などにおける神は人間の外にある神ではなく、人間や自然と連続し、一体化した神である。しかし、それは"かみ"（上）であることにおいて、一つの権威・権力ではないか。権力は向臥は自己の向臥であるという意味において日本の神は向臥性としてあらわれる。

我々の視点……天皇制の超克及び靖□斗争に関わるとき、何故我々は徹底した宗教批判をせざるを得ないのか。それは普遍化された共同の幻想性に自己＝主体をあずけることなく、クサビを打つべく批判的主体をいかに獲得しうるのか、という向臥でもあると考える。

以上で笠原芳光氏の宗教・キリスト教・キリスト・イエスに関しての人間性（観）及び向臥意識の所在をまとめてきたが、さらに他のキリスト者等のそれらに関する向臥意識との対峙を通して、笠原氏の、そして我々の打つべき思想（＝現実）の課題を明らかにしていきたい。

○ 三島康男

キリスト教の幻想的観性に歯止めを〈超越思考〉ではなく、

〈科学性〉に基づいて世俗化へ貫徹し、そのときただの人となる具体的方途を日常性の中で追求する前進がはじまる。そして本質を適確にみきわめて"この道しかないぞ"という、まさにその道がただの人への道である。
そのように生きることがイエスに生きることであり、
現代の思想との真の結び付きが可能となる⇒キリスト教立場の実現へ

〈超越思考〉及び本源を志向する思考形態、
主張としてはそこからでていく方向を示しながらその本源に到達する具体的理論は少しも明確に提示されていない。
—高尾批判へ—
科学が教条(宗教性)に陥いるのはむしろ原点を押えないからではなく、観念をもつた人間分析の欠陥からくるのである。
—吉本「共同幻想論」の評価—

◦ 高尾利数

"ただの人"イエスの復权——本来まったく無なるものが、つまり主体としてはまったく消滅する一点において、尚しくも一個の主体として立てられ、他者および自然と豊かな相互連帯、依存の関係のなかにおかれ、喜び、いつくしみ、健やかさ、美しさを感じるように置かれていること(これが「神の国」の内実)　この単純にして、文字どおり「有難い」事実を心ひくく感謝しつつ認め受けとめる生きざまをこそ、イエスは〈信仰〉(=事実を事実として、偏見なく願望なく受容し、それに主体的に参与しつつ生きる生きざまの総体)と呼んだのである。
……それは失楽園へのノスタルジアでもなく、空想としてのユートピアの願望的先取りでもなく、現在的テロスの実在の証言として、われわれを正しく「ただの人」たらしめ、あらゆる「ただならぬ」状況への希望に満ちた否定的かかわりを促す現実なのである。
たえず現実的、具体的、歴史的現実との責任応答的生きざまのただ中にある神。神は、われわれの存在の無根拠性、廃棄不可能な主体性、そして選び取る自由の責任性の現実に呼応する徴表である。

◦ 佐々木宏己

原点の実在……私たちにとって大切なものは唯一つ、私たち自身の成立の根柢において「信仰」や「宗教」をも含めてあらゆる人のはたらきに先立って永遠に現存する「インマヌエル」—神われらとともに在す—という事実そのもの、すなわち、人の子イエスの一生としてまざまざと眼前に触れることができるように示されたかの一点、絶対に弁証法的(不可分、不可同、不可逆的)な神人の活ける関係にほかならぬ、インマヌエルなる神、この原関係の直接の支配のもとに在ることの一点では「キリスト者も反キリスト者」も「神学も哲学」もない。

※ 次に、現代における神学的状況を、滝沢氏の分析において整理する。

◦ 自由主義神学——近代(科学、ヒューマニズム)支配——キリスト教の市民权の獲得へ。
「イエス・キリスト」から超越的な要素を一切排除しつつ、近代社会の理想像を描きだすことによってキリスト教の有効性を時代に立証しようという試み。
近代ヒューマニズムの存立の空怪 ⟶ 試みの空しさ。

◦ 弁証法的神学(危機神学)------カール・バルトの出現

バルトの眼 ⟨ インマヌエルの原事実(A)
　　史的イエスの生内容(B)　この両者の区別関係の明確化
⇓
バルト主義者) への堕落の傾向排除
正統 〃)

◦ バルト ⟶ バルト主義者 ——2方への後退
　　自然的神学

バルトがイエスにおいて見るのは、もっぱら永遠に現在的な神人の存在ないしはたらきに限られる。イエスという人間的主体の、それじたい正確さを問われるべき自己決定の内容—つまり史的イエスの言動—の確認と評価は、完全にイエスにかんするかれの関心の外に脱落する。イエス自身の服従といっても、それはいつもただそれだけで神なる永遠の「子」の「父」にたいするそれであって、肉なる人イエスの、父の御意、言ないし義に対する服従ではない。

◦ 史的イエス------イエスはただ、一人の人として、自然に十分に生きた人。

「史的イエス」の位置と役割が正しく取りあげるためには、何よりもまず第一に史的イエスがまさにそこからそこに向かって、その完全な姿、徴しとして現存していた神人の限界点に終始一貫堅くとどまることによって、バルトの神学になお残る旧き思惟を一掃するとき「史的イエス」は始めて私自身のために、その生を、生々とした姿で現わすことでしょう。そのことなしに、バルト神学を超えようとする者は「人間性」「科学性」それほか何ものの名によろうと、かならずバルト以前の巷に顛落するほかはない。